



[I] $a \neq 0, -1$ を満たす実数とする. O を原点とする xy 平面上において次の2つの曲線を考える:

$$C_1: x^2 - y^2 = 1, C_2: y = ax^2 - \frac{3}{2a+2}$$

以下の各問の答えのみを解答欄に記入せよ.

問1 $a=1$ のとき, C_1 と C_2 の共有点の座標をすべて求めよ.

問2 C_1 と C_2 が相異なる4点で交わるための a に対する必要十分条件を求めよ.

問3 C_1 と C_2 が相異なる4点で交わる時, それら4点すべてを通る円の中心の座標を a を用いて表せ. また, その円の半径を r とするとき, 以下の空欄に適する1以上の整数を解答欄に記入せよ.

$$r = \sqrt{\frac{-a^3 - a^2 + \text{ア}a + \text{イ}}{a \text{ウ} (a + \text{エ})}}$$

解答 問1 $(\frac{\sqrt{5}}{2}, \frac{1}{2}), (-\frac{\sqrt{5}}{2}, \frac{1}{2})$

問2 $\frac{-2-\sqrt{3}}{2} < a < -1, \frac{-2+\sqrt{3}}{2} < a < 0, 0 < a < 1$

問3 中心 $(0, \frac{1}{a})$, 半径 $\sqrt{\frac{-a^3 - a^2 + 4a + 1}{a^2(a+1)}}$
 $C_1: x^2 - y^2 = 1 \dots \text{①} \quad C_2: y = ax^2 - \frac{3}{2a+2} \dots \text{②}$

問1

$a=1$ のとき, ②は

$$y = x^2 - \frac{3}{4} \iff x^2 = y + \frac{3}{4} \dots \text{③}$$

①, ③の共有点の座標は,

$$(y + \frac{3}{4}) - y^2 = 1 \iff (2y - 1)^2 = 0 \iff y = \frac{1}{2}$$

これを①に代入して

$$x^2 - (\frac{1}{2})^2 = 1 \iff x = \pm \frac{\sqrt{5}}{2}$$

したがって, 共有点の座標は $(\frac{\sqrt{5}}{2}, \frac{1}{2}), (-\frac{\sqrt{5}}{2}, \frac{1}{2})$ である.

問2

$a \neq 0, -1$ に注意して

$$\begin{cases} x^2 - y^2 = 1 \\ y = ax^2 - \frac{3}{2a+2} \end{cases} \iff \begin{cases} x^2 - y^2 = 1 \\ a(x^2 - y^2) + y = a \cdot 1 + (ax^2 - \frac{1}{2a+2}) \end{cases}$$

$$\iff \begin{cases} x^2 = y^2 + 1 \dots \text{④} \\ 2a(a+1)y^2 - 2(a+1)y + 2a^2 + 2a - 3 = 0 \dots \text{⑤} \end{cases}$$

⑤が異なる2つの実数解をもつとき, ④より, 連立方程式は相異なる4つの実数解 (x, y) をもつので, C_1, C_2 は相異なる4点で交わる. ⑤の判別式を D として,

$$D/4 = (a+1)^2 - 2a(a+1)(2a^2 + 2a - 3) > 0$$

$$\iff (a+1)((a+1) - 2a(2a^2 + 2a - 3)) > 0$$

$$\iff (a+1)(-4a^3 - 4a^2 + 7a + 1) > 0$$

$$\iff (a+1)(a-1)(4a^2 + 8a + 1) < 0$$

$$\iff (a+1)(a-1)\left(a - \frac{-2+\sqrt{3}}{2}\right)\left(a - \frac{-2-\sqrt{3}}{2}\right) < 0$$

したがって, $a \neq 0, -1$ と合わせて

$$\frac{-2-\sqrt{3}}{2} < a < -1, \frac{-2+\sqrt{3}}{2} < a < 0, 0 < a < 1$$

問3

C_1, C_2 の全ての共有点を通る図形を実数 k を用いて

$$(x^2 - y^2 - 1) + k(ax^2 - y - \frac{3}{2a+2}) = 0 \dots (*)$$

と表すことができる. (*)は $k = -\frac{2}{a}$ をのとき x^2, y^2 の係数が一致するので円を表す.

4つの共有点を通る円はただ一つ存在するので, これが求める円の方程式となる. したがって,

$$(x^2 - y^2 - 1) - \frac{2}{a}(ax^2 - y - \frac{3}{2a+2}) = 0$$

$$\iff -x^2 - y^2 + \frac{2}{a}y - 1 + \frac{3}{a(a+1)} = 0$$

$$\iff x^2 + y^2 - \frac{2}{a}y + \frac{a^2 + a - 3}{a(a+1)} = 0$$

$$\iff x^2 + (y - \frac{1}{a})^2 = \frac{-a^3 - a^2 + 4a + 1}{a^2(a+1)}$$

よって, 中心 $(0, \frac{1}{a})$, 半径 $r = \sqrt{\frac{-a^3 - a^2 + 4a + 1}{a^2(a+1)}}$ の円である.

二次で勝つならYMSの二次試験対策

2/6水
17:45 ~ 20:15頃
日医
(前期)

対策
内容

二次試験の要点解説

個人面接対策

集団討論対策

二次の
ポイント

なんとといっても30分間の集団討論です。YMSでは本番で取り上げられるテーマを予想し、一緒に試験を受けるライバルたちと本番さながらの集団討論を行います。

【申込方法】・一次試験合格者が対象です。
・受付開始は各大学ともに一次の結果発表以降となります。
・お電話(03-3370-0410)でご予約下さい。

申し込み受付中です。詳細はYMSホームページをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

YMS 〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-37-14
https://yms.ne.jp/

TEL 03-3370-0410

【Ⅱ】 空間において1点Oをとり、相異なる4点P, A, B, Cを頂点とする四面体PABCについて考える。四面体PABCは点Oを中心とする半径が1の球に内接しており、三角形ABCは1辺の長さがlの正三角形であると仮定する。

問1 lの取り得る値の範囲を答えよ。答のみでよい。

問2 $s = \vec{AP} \cdot \vec{AB}$, $t = \vec{AP} \cdot \vec{AC}$ とおき、点Pから三角形ABCを含む平面に垂線PHを下ろす。このとき、 \vec{AH} をl, s, tを用いて \vec{AB} と \vec{AC} の1次結合で表せ。

問3 問2においてlを固定し、点Pが $2s - t = l^2$ を満たしながら点Oを中心とする半径1の球面上を動くとき、四面体PABCの体積の最大値V(l)を求めよ。

【解答】 問1 $0 < l \leq \sqrt{3}$ 問2 $\vec{AH} = \frac{4s-2t}{3l^2}\vec{AB} + \frac{4t-2s}{3l^2}\vec{AC}$

問3 $V(l) = \frac{\sqrt{3}}{12} l^2 \left(\sqrt{1 - \frac{l^2}{3}} + \sqrt{1 - \frac{l^2}{12}} \right)$

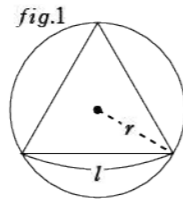
問1

球面を、3点A, B, Cを含む平面で切るとき、その断面は、半径が1以下の円である。この断面の半径をrとおくとき、 $0 < r \leq 1$ であるから、正弦定理より、

$$\frac{l}{\sin \frac{\pi}{3}} = 2r \iff l = \sqrt{3}r$$

したがって、

$$0 < l \leq \sqrt{3}$$



問2

点Hが平面ABC上にあるとき、実数m, nを用いて

$$\vec{AH} = m\vec{AB} + n\vec{AC}$$

と表すことができる。このとき、

$$\vec{PH} = \vec{AH} - \vec{AP} = m\vec{AB} + n\vec{AC} - \vec{AP}$$

ここで、 $\vec{PH} \perp (\text{平面ABC})$ なので $\vec{PH} \cdot \vec{AB} = 0$, $\vec{PH} \cdot \vec{AC} = 0$ を満たせばよい。

$$\vec{PH} \cdot \vec{AB} = (m\vec{AB} + n\vec{AC} - \vec{AP}) \cdot \vec{AB} = 0$$

$$\iff m|\vec{AB}|^2 + n\vec{AB} \cdot \vec{AC} - \vec{AP} \cdot \vec{AB} = 0$$

$$\iff m \cdot l^2 + n \cdot \frac{l^2}{2} - s = 0 \quad \dots \textcircled{1}$$

$$\vec{PH} \cdot \vec{AC} = (m\vec{AB} + n\vec{AC} - \vec{AP}) \cdot \vec{AC} = 0$$

$$\iff m\vec{AB} \cdot \vec{AC} + n|\vec{AC}|^2 - \vec{AP} \cdot \vec{AC} = 0$$

$$\iff m \cdot \frac{l^2}{2} + n \cdot l^2 - t = 0 \quad \dots \textcircled{2}$$

①, ②より、 $m = \frac{4s-2t}{3l^2}$, $n = \frac{4t-2s}{3l^2}$ であり、

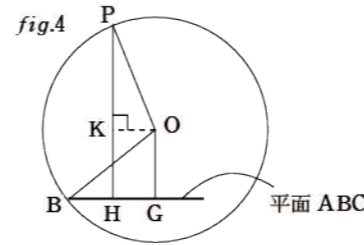
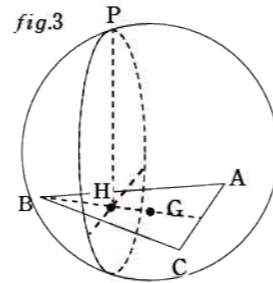
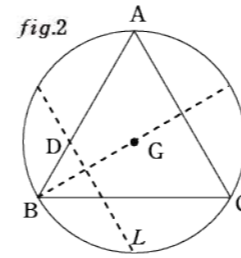
$$\vec{AH} = \frac{4s-2t}{3l^2}\vec{AB} + \frac{4t-2s}{3l^2}\vec{AC}$$

問3

$2s - t = l^2$ のとき、問2の結果から

$$\begin{aligned} \vec{AH} &= \frac{2l^2}{3l^2}\vec{AB} + \frac{4t - (l^2 + t)}{3l^2}\vec{AC} \\ &= \frac{2}{3}\vec{AB} + \left(\frac{t}{l^2} - \frac{1}{3}\right)\vec{AC} \end{aligned}$$

tが変化するとき、点Hは、ABを2:1に内分する点をDとおくとき、点Dを通り、辺ACに平行な直線L上に存在する。四面体PABCの体積が最大となるのは、PHの長さ(三角形ABCを底面と見たときの高さ)が最大となるときである。これは、三角形ABCの重心をGとすると、fig.2のように直線BGと直線Lとの交点に点Hがあるときである。このとき、3点P, B, Gを含む平面を切り出すとfig.4のようになる。



このとき、 $BG = \frac{l}{\sqrt{3}}$, $GH = \frac{\sqrt{3}}{6}l$ であるから、

$$OG = \sqrt{1^2 - \left(\frac{l}{\sqrt{3}}\right)^2}, \quad PK = \sqrt{1^2 - \left(\frac{\sqrt{3}}{6}l\right)^2}$$

であり、体積の最大値V(l)は

$$\begin{aligned} V(l) &= \frac{1}{3} \cdot (\triangle ABC \text{の面積}) \times PH \\ &= \frac{1}{3} \cdot \frac{\sqrt{3}}{4} l^2 \cdot \left(\sqrt{1 - \frac{l^2}{3}} + \sqrt{1 - \frac{l^2}{12}} \right) \\ &= \frac{\sqrt{3}}{12} l^2 \left(\sqrt{1 - \frac{l^2}{3}} + \sqrt{1 - \frac{l^2}{12}} \right) \end{aligned}$$

【Ⅲ】 $f(x) = \log(1+x^2)$ ($x > 0$) とする。また、実数 a, h は

$$0 < a < 1, 0 < h < 1, 0 < a+h < 1$$

を満たすとする。以下の各問に答えよ。

問1 k を正の実数とする。このとき、以下の不等式が成り立つことを示せ。

$$x - \frac{x^2}{2} \leq \log(1+x) \leq x - \frac{1}{k+1} \frac{x^2}{2} \quad (0 \leq x \leq k)$$

問2 各 a, h に対して、以下の等式を満たす c ($a < c < a+h$) がただ1つ存在することを示せ。

$$f(a+h) = f(a) + f'(c)h$$

また、 d を以下のように定めたとき、 c を d を用いて表せ。

$$d = \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$$

問3 問2において a を固定し、 c を h の関数と考えて $c(h)$ と書くことにする。また、 $\theta(h)$ を以下のように定める。

$$\theta(h) = \frac{c(h) - a}{h}$$

このとき、極限 $\lim_{h \rightarrow 0+0} \theta(h)$ を求めよ。ただし、記号 $\lim_{h \rightarrow 0+0}$ は $h > 0$ の範囲で h を 0 に限りなく近づけたときの極限を意味する。

【解答】 問1 証明略 問2 証明略, $c = \frac{1 - \sqrt{1-d^2}}{d}$ 問3 $\frac{1}{2}$

問1

$$F(x) = \log(1+x) - \left(x - \frac{x^2}{2}\right) \quad (x \geq 0) \text{ とおく.}$$

$$F'(x) = \frac{1}{1+x} - (1-x) = \frac{x^2}{1+x} \geq 0$$

よって、 $F(x)$ は単調増加であるから $F(x) \geq F(0) = 0$

すなわち、 $x - \frac{x^2}{2} \leq \log(1+x)$ が成り立つ。

さらに、 $G(x) = \left(x - \frac{1}{k+1} \cdot \frac{x^2}{2}\right) - \log(1+x)$ ($x \geq 0$) とおく。

$$G'(x) = 1 - \frac{x}{k+1} - \frac{1}{1+x} = \frac{x}{1+x} - \frac{x}{k+1} = x \left(\frac{1}{1+x} - \frac{1}{k+1} \right)$$

ここで、 $0 \leq x \leq k$ において、 $\frac{1}{1+x} \geq \frac{1}{1+k}$ であるから $G'(x) \geq 0$

よって、 $G(x)$ は単調増加であるから $G(x) \geq G(0) = 0$

すなわち $\log(1+x) \leq x - \frac{1}{k+1} \cdot \frac{x^2}{2}$ が成り立つ。

(証明終わり)

問2

$f(x) = \log(1+x^2)$ は全ての实数 x に関して連続かつ微分可能である。

区間 $a \leq x \leq a+h$ において平均値の定理より、

$$\frac{f(a+h) - f(a)}{(a+h) - a} = f'(c) \quad \dots(*)$$

を満たす実数 c が $a < c < a+h$ に少なくとも1つ存在する。

さらに、 $f'(x) = \frac{2x}{1+x^2}$, $f''(x) = \frac{2(1-x^2)}{(1+x^2)^2}$ であり、 $0 < a, a+h < 1$ のもとで考えれば、 $a < x < a+h$ において $f''(x) > 0$ である。すなわち関数 $f'(x)$ は単調増加である。

したがって、(*) を満たす実数 c は1つしか存在しない。

$$\begin{aligned} (*) &\iff f(a+h) - f(a) = f'(c) \cdot h \\ &\iff f(a+h) = f(a) + f'(c) \cdot h \end{aligned}$$

であり、これを満たす c ($a < c < a+h$) はただ1つ存在する。(証明終わり)

$d = \frac{f(a+h) - f(a)}{h}$ とおくと、(*) より $d = f'(c)$ であるから、

$$\begin{aligned} d = \frac{2c}{1+c^2} &\iff dc^2 - 2c + d = 0 \\ &\iff c = \frac{1 \pm \sqrt{1-d^2}}{d} \quad \dots \textcircled{1} \end{aligned}$$

ここで、 c は $0 < c < 1$ を満たす実数であり、相加平均と相乗平均の関係から

$$d = \frac{2}{c + \frac{1}{c}} \leq \frac{2}{2\sqrt{c \cdot \frac{1}{c}}} = 1$$

となるが、 $c \neq 1$ であるから等号が成り立たず $0 < d < 1$ であることがわかる。①の解

のうち $\frac{1 + \sqrt{1-d^2}}{d}$ は d について単調減少であり、 $0 < d < 1$ から

$$\frac{1 + \sqrt{1-d^2}}{d} > \frac{1 + \sqrt{1-1^2}}{1} = 1$$

となり、 $0 < c < 1$ を満たさない。したがって、 $d = f'(c)$ を満たす c を d を用いて表すと、

$$c = \frac{1 - \sqrt{1-d^2}}{d}$$

問3

$$\begin{aligned} \theta(h) &= \frac{c(h) - a}{h} = \frac{1}{h} \left(\frac{1 - \sqrt{1-d^2}}{d} - a \right) = \frac{1 - ad - \sqrt{1-d^2}}{hd} \\ &= \frac{(1-ad)^2 - (1-d^2)}{hd} \cdot \frac{1}{1-ad + \sqrt{1-d^2}} \\ &= \frac{(1+a^2)d - 2a}{h} \cdot \frac{1}{1-ad + \sqrt{1-d^2}} \\ &= (1+a^2) \cdot \frac{d - \frac{2a}{1+a^2}}{h} \cdot \frac{1}{1-ad + \sqrt{1-d^2}} \\ &= (1+a^2) \cdot \frac{d - f'(a)}{h} \cdot \frac{1}{1-ad + \sqrt{1-d^2}} \end{aligned}$$

以下、次の2つの極限をそれぞれ求める。

$$A = \lim_{h \rightarrow 0+0} \frac{d - f'(a)}{h}, \quad B = \lim_{h \rightarrow 0+0} \frac{1}{1 - ad + \sqrt{1-d^2}}$$

$a < c(h) < a+h$ より、はさみうちの原理から $\lim_{h \rightarrow 0+0} c(h) = a$ であり、

$d = f'(c) = \frac{2c}{1+c^2}$ は連続関数であるから、 $\lim_{h \rightarrow 0+0} d = f'(a) = \frac{2a}{1+a^2}$

したがって、

$$B = \frac{1}{1 - af'(a) + \sqrt{1 - \{f'(a)\}^2}} = \frac{1+a^2}{2(1-a^2)}$$

次に A について、

$$\begin{aligned} \frac{d - f'(a)}{h} &= \frac{1}{h} \left\{ \frac{f(a+h) - f(a)}{h} - f'(a) \right\} \\ &= \frac{1}{h^2} \left[\log\{1 + (a+h)^2\} - \log(1+a^2) - \frac{2ah}{1+a^2} \right] \\ &= \frac{1}{h^2} \left[\log\left\{1 + \frac{(2a+h)h}{1+a^2}\right\} - \frac{2ah}{1+a^2} \right] \end{aligned}$$

更に、問1で示した不等式で $x = k = \frac{(2a+h)h}{1+a^2}$ として、

$$\begin{aligned} \frac{(2a+h)h}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2 h^2}{2(1+a^2)^2} &\leq \log\left\{1 + \frac{(2a+h)h}{1+a^2}\right\} \leq \frac{(2a+h)h}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2 h^2}{2(k+1)(1+a^2)^2} \\ \frac{h^2}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2 h^2}{2(1+a^2)^2} &\leq \log\left\{1 + \frac{(2a+h)h}{1+a^2}\right\} - \frac{2ah}{1+a^2} \leq \frac{h^2}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2 h^2}{2(k+1)(1+a^2)^2} \\ \frac{1}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2}{2(1+a^2)^2} &\leq \frac{d - f'(a)}{h} \leq \frac{1}{1+a^2} - \frac{(2a+h)^2}{2(k+1)(1+a^2)^2} \end{aligned}$$

$h \rightarrow 0+0$ のとき $k \rightarrow +0$ であるから、はさみうちの原理を用いて、

$$A = \frac{1}{1+a^2} - \frac{(2a)^2}{2(1+a^2)^2} = \frac{1-a^2}{(1+a^2)^2}$$

以上より、

$$\lim_{h \rightarrow 0+0} \theta(h) = (1+a^2)AB = \frac{1}{2}$$



[IV] 関数 $f(x)$ は2回微分可能で、その2次までの導関数 $f'(x)$, $f''(x)$ はいずれも連続とし、すべての実数 x に対して $f''(x) \geq 0$ を満たすとする。 xy 平面上の曲線 $C: y=f(x)$ 上の点 $P(t, f(t))$ における法線上に点 $Q(a, b)$ を $PQ=1$, $b < f(t)$ を満たすようにとるとき、以下の各問いに答えよ。

問1 \vec{PQ} を求めよ。答のみでよい。

問2 a, b を t の式で表せ。答のみでよい。

問3 問2の a, b をそれぞれ $a(t), b(t)$ と表すとき、 $b'(t)=f'(t)a'(t)$ が成り立つことを示せ。

問4 T_1, T_2 は $T_1 < T_2$ を満たす実数とする。 t が T_1 から T_2 まで変化するとき、2点 P, Q が描く曲線の長さをそれぞれ $L_P(T_1, T_2), L_Q(T_1, T_2)$ で表す。 $L_Q(T_1, T_2)$ と $L_P(T_1, T_2)$ の差を $\Delta L(T_1, T_2)$ とする。

$$\Delta L(T_1, T_2) = L_Q(T_1, T_2) - L_P(T_1, T_2)$$

このとき次が成り立つことを示せ。

$$\Delta L(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} \frac{f''(t)}{1+[f'(t)]^2} dt$$

問5 問4までの結果を踏まえて、関数 $f(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ に対して、 $\Delta L(T_1, T_2)$ において同時に $T_1 \rightarrow -\infty, T_2 \rightarrow \infty$ としたときの極限值

$$\lim_{T_1 \rightarrow -\infty, T_2 \rightarrow \infty} \Delta L(T_1, T_2)$$

を求めよ。

【解答】 問1 $\vec{PQ} = \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \begin{pmatrix} f'(t) \\ -1 \end{pmatrix}$

問2 $a = t + \frac{f'(t)}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}}, b = f(t) - \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}}$ 証明略

問3 証明略 問4 証明略 問5 π

問1

\vec{PQ} の方向ベクトルは $\begin{pmatrix} f'(t) \\ -1 \end{pmatrix}$

$b < f(t), |\vec{PQ}|=1$ より $\vec{PQ} = \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \begin{pmatrix} f'(t) \\ -1 \end{pmatrix}$

問2

$$\vec{OQ} = \vec{OP} + \vec{PQ} = \begin{pmatrix} t \\ f(t) \end{pmatrix} + \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \begin{pmatrix} f'(t) \\ -1 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} t + \frac{f'(t)}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \\ f(t) - \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \end{pmatrix}$$

よって $a(t) = t + \frac{f'(t)}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}}, b(t) = f(t) - \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}}$

問3

$$b'(t) = f'(t) + \frac{f'(t) \cdot f''(t)}{\sqrt{1+[f'(t)]^2} \cdot (1+[f'(t)]^2)} = f'(t) \cdot \left(1 + \frac{f''(t)}{(1+[f'(t)]^2)^{\frac{3}{2}}} \right) \dots\dots ①$$

ここで、

$$a'(t) = 1 + \frac{f''(t)\sqrt{1+[f'(t)]^2} - f'(t) \cdot \frac{1}{\sqrt{1+[f'(t)]^2}} \cdot f'(t) \cdot f''(t)}{1+[f'(t)]^2} = 1 + \frac{f''(t)(1+[f'(t)]^2) - [f'(t)]^2 \cdot f''(t)}{(1+[f'(t)]^2)^{\frac{3}{2}}} = 1 + \frac{f''(t)}{(1+[f'(t)]^2)^{\frac{3}{2}}} \dots\dots ②$$

①②より $b'(t)=f'(t)a'(t)$ が成り立つ。(証明終わり)

問4

$$L_P(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} \sqrt{1+[f'(t)]^2} dt$$

$$L_Q(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} \sqrt{[a'(t)]^2 + [b'(t)]^2} dt$$

ここで、 $b'(t)=f'(t)a'(t)$ であるから

$$L_Q(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} \sqrt{[a'(t)]^2 + [f'(t)a'(t)]^2} dt = \int_{T_1}^{T_2} \sqrt{[a'(t)]^2(1+[f'(t)]^2)} dt$$

さらに、 $f''(t) \geq 0$ から $a'(t) > 0$ だから

$$L_Q(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} a'(t)\sqrt{1+[f'(t)]^2} dt$$

よって $\Delta L(T_1, T_2) = L_Q(T_1, T_2) - L_P(T_1, T_2)$

$$= \int_{T_1}^{T_2} (a'(t)-1)\sqrt{1+[f'(t)]^2} dt$$

$$= \int_{T_1}^{T_2} \frac{f''(t)}{(1+[f'(t)]^2)^{\frac{3}{2}}} \sqrt{1+[f'(t)]^2} dt$$

$$= \int_{T_1}^{T_2} \frac{f''(t)}{1+[f'(t)]^2} dt \quad (\text{証明終わり})$$

問5

$f(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2}, f'(x) = \frac{e^x - e^{-x}}{2}, f''(x) = \frac{e^x + e^{-x}}{2}$ であるから

$\frac{f''(t)}{1+[f'(t)]^2}$ を計算すると $\frac{f''(t)}{1+[f'(t)]^2} = \frac{2}{e^t + e^{-t}} = \frac{2e^t}{e^{2t} + 1}$

よって $\Delta L(T_1, T_2) = \int_{T_1}^{T_2} \frac{2e^t}{e^{2t} + 1} dt$

$x = e^t$ とおくと $\Delta L(T_1, T_2) = 2 \cdot \int_{e^{T_1}}^{e^{T_2}} \frac{1}{x^2 + 1} dx$ と書ける。

ここで $x = \tan \theta \left(-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2} \right)$ とおき、 $e^{T_1} = \tan \theta$ となる θ を θ_1 とし、

$e^{T_2} = \tan \theta$ となる θ を θ_2 とすると

$$\begin{aligned} \Delta L(T_1, T_2) &= 2 \cdot \int_{\theta_1}^{\theta_2} \frac{1}{\tan^2 \theta + 1} \frac{1}{\cos^2 \theta} d\theta \\ &= 2 \cdot \int_{\theta_1}^{\theta_2} d\theta \\ &= 2 \cdot [\theta]_{\theta_1}^{\theta_2} \\ &= 2(\theta_2 - \theta_1) \end{aligned}$$

ここで $T_1 \rightarrow -\infty, T_2 \rightarrow +\infty$ とすると、 $\theta_1 \rightarrow +0, \theta_2 \rightarrow \frac{\pi}{2}$ となることから

$$\lim_{T_1 \rightarrow -\infty, T_2 \rightarrow +\infty} \Delta L(T_1, T_2) = \lim_{\theta_1 \rightarrow +0, \theta_2 \rightarrow \frac{\pi}{2}} \Delta L(T_1, T_2) = \lim_{\theta_1 \rightarrow +0, \theta_2 \rightarrow \frac{\pi}{2}} 2(\theta_2 - \theta_1) = \pi$$